

## 第26期第1回評議員会の報告

総合計画担当理事 木田 秀次  
庶務担当理事 青木 孝

### 1. はじめに

去る1991年2月2日(土)午後、今期の第1回評議員会が気象庁第一会議室において開かれた。評議員会は、学会運営や学会活動について、理事会に提言を行う学会の諮問機関であり、約10名の評議員(学会員)によって構成される。今期の評議員は次に紹介する方々である。幅広い視野から、得てして近視眼的になりやすい学会運営に活を入れて頂いた。

なお、今回の評議員会には、名誉会員の和達清夫氏、吉武素二氏、高橋浩一郎氏の三氏にも御出席頂いた。

### 2. 第26期評議員の紹介(五十音順)

伊藤 久雄氏(都立小山台高校校長)

気象教育とその発展に取り組み中。教育と普及委員会元委員。

大崎 俊彦氏(富士総合研究所取締役)

民間シンクタンクにおける研究指導者。

河村 武氏(筑波大学教授)

長期に気象学会常任理事として各委員会で尽力。

岸保勘三郎氏(前東京大学教授)

第21期、第22期の気象学会元理事長。

倉嶋 厚氏(NHK解説委員)

予報官の経験を生かして気象解説者として活躍中。

猿橋 勝子氏(地球化学研究協会専務理事)

地球化学者のパイオニア。女性科学者の声を広く社会化。

立平 良三氏(気象庁長官)

気象業務の総元締め。気象学会元理事。

田中 佐氏(宇宙開発事業団室長)

宇宙からの地球観測事業とその将来計画に活躍中。

沼口 敦氏(東京大学助手)

気候モデルの新進研究者。若手研究者の第1回夏の学校の世話人。

樋口 敬二氏(前名古屋大学教授・現中部大学教授)

日本学術会議会員。

以上、10名。

### 3. 議事など

#### (1) 理事長の挨拶

気象学会の活動状況の説明

#### (2) 理事および監事の紹介

#### (3) 名誉会員の挨拶

#### (4) 評議員の提言

#### (5) 評議員と理事との意見交換

#### (6) 副理事長の挨拶

以上のような経過で会は進められた。各評議員の意見・提言を極く簡単に紹介すると、

伊藤:「学校教育に開かれた学会になって欲しい。生徒の気象庁に対する人気は大変大きい。先生方は、個人レベルで気象教育に努力されている。夏季大学に参加している教師も少なくない。一般的に、気象の専門書は難しいし、また疑問などに対応していただける適当な部署もない。学会が気象教育に対して果たせる役割は大きい」

大崎:「10年先を見て、学会活動に取り組んで欲しい。学会を取巻く状況は、学際化・国際化・情報化がキーワードになっている。気象学会は情報の発信基地として機能するのが大切である。特に、具体的に気象情報の交流や発信の窓口になってもらいたい」

河村:「天気編集委員長であった時のやり残した仕事であるので申し訳ないが、天気誌はもっと易しく柔らかいものにするのがよいと思う。また、人間が出てくる記事がよい。情報誌という意味から、短くてもよいので広い範囲から沢山の情報を流して欲しい。気象庁の内部的ニュースでも外部の者には関心がある」

岸保:「再来年の夏のIAMAPはぜひとも成功して欲しい」

倉嶋:「気象学会は、学問的批判機関として、気象ジャーナリズムの質の向上に寄与してほしい」

猿橋:「地球化学を通じて気象学に係わってきたが、研究と社会の結びつきのために、環境科学の市民講座を開いたり、女性科学者のための活動を行ってきた。これまでは、気象学会は物理に重心がかかり過ぎているくらいがあった。しかし、今では、化学との相互乗り入れが重要になっている」

立平：「気象業務に携わっている気象庁職員が気象学の進歩の成果にもっと接することができるよう、学会として協力してほしい。そのことでは、特に、天気誌に期待したい。なお、米国には気象技術者の学会があるので、その活動も参考にしろう」

田中：「GMS 4 の打ち上げが近いが、気象関係者の関心と協力を期待したい。特に、地球環境問題に関連して、研究者の協力が欲しい」

沼口：「気象関係の若手研究者の声を代弁する。若手研究者（主に大学院生）間の全国的規模での交流が最近組織化されつつある。それに対する学会の支援を期待している。また気象学会は、学際交流の機関としての役割を担う必要があるのではないか」

樋口：（欠席）

#### 4. 評議員の意見・提言

当評議員会の終了後、評議員の方々に文書による提言を改めて寄せて頂きました。7名の方から寄稿がありましたので、それらをここに合わせて報告致します。

〈伊藤久雄評議員〉

日本気象学会が益々発展し、学会員も増加していく傾向にあるのは喜ばしいことと思う。しかし、会員がこの会になにを望んで入会したか、学会が、果たしてそれに応えているか、満たされない点があればそれは何か、そしてどうすればよいか、といったことが課題になる。私は気象教育、特に小・中・高等学校の教師の立場から、気象学会にお願いしたい。

現在「教育と普及委員会」の活動、夏季大学の開催地の拡大などの取組みは好評のようであるが、さらに次のような点について検討して頂きたいと思っている。

1. 夏季大学については、年々工夫の跡が見えるが、新しい教育の内容を考慮した、教材も一部（教員以外の方もおられるので）取り入れる。

2. 機関誌「天気」に幅広く気象教育に関する話題や気象教育論文を盛り込む。また「天気」の中で気象教育初級・中級講座などを設ける試みはどうであろうか。

3. 学校教育にパソコンが導入されつつある。それに対応するデータやソフトの開発が非常に遅れている。教育に関心のある気象の専門家と教師の共同研究開発プロジェクトなどができないか。

4. 大学における理科や地学の講座の中で気象教育は現在必ずしも充実しているとはいえない。現職研修に対して学会で援助できる道を探してほしい。

5. 学校教育の中で「地球環境問題」はこれから避け

て通れない教材である。児童・生徒の発達段階を考慮した内容・方法や教材の開発について学会でも関心を持ってほしい。

〈大崎俊彦評議員〉

国際化・学際化・情報化などの歴史的潮流の中で、“情報発信機能をもった学際的学会”機能と活動を、より一層充実されることが肝要かと存じ、以下提案させていただきます。

情報化時代では、情報発信機能を保有する都市・企業や学会などに、人・金・物そして情報が集まると考えます。また、従来の科学的アプローチの「理論」と「観測・実験」分野に加えて、“第三の科学”として注目されている「数値解析（スーパーコンピューティング）」分野は、情報科学技術の進展とともに、ますますその重大性を増大させていくと予測されます。そして現在、気象庁殿においては、永年にわたる研究・開発・運用実績により、世界最大級の「全球数値予報モデル」を稼働させており、力学的中・長期予報でもかなりの成果を挙げております。

一方、社会・経済・産業などのグローバル化・高度情報化により、戦略情報解析やリスクマネジメントという視点から、世界各地の様々な天候変動に伴う環境変化をリアルタイムに監視し、かつ予測できるシステムを構築する必要があります。さらに地球環境問題は、全世界の重要かつ緊急課題となっています。

そこで気象庁殿の御協力・御支援を得て、“気象観測データのリアルタイム提供”や、“気象予報データのオンラインネットワーク提供”などの窓口機関となり、情報発信機能を有する学会となることを提案致します。すなわち、日本気象学会殿が、「全球数値予報モデル」を活用した地球環境監視予測システムなどの構築の場となり、自然科学分野に限ることなく、社会経済分野など様々な研究者が学術交流できる学際的学会として、大きな役割を担っていくことを期待します。地球環境問題などの学術研究や科学技術の振興、またリスクマネジメントなどによる産業発展などに資する資料提供、さらには、数値予報モデルを持たない発展途上国などへの情報提供による気象災害の監視・予測など、従来活動に加えて様々な国際的貢献を果たし、より大きな情報発信基地となられることを期待する次第です。

〈河村武評議員〉

私は前の期の常任理事として“天気”の編集を担当していたので、その後まだ数カ月しか経っていません。したがって適切な意見や提言を申し上げ難いのですが、

“天気”について、二三の要望を申し上げることにします。

数年前から天気の内容を解説や論文を掲載するだけでなく、情報誌の性格を持たせて多様な記事を掲載することを要請されました。編集委員の方々の御協力をいただき、このような会員の要望にそうよう協力をし、それなりの成果はあったように思います。今期はこれまで長年にわたって編集委員として活躍された藤谷編集委員長のもとで、編集が行われているので、心配ないのですが、編集委員の協力だけで雑誌ができるものでないことも事実です。他の理事や会員の方々から、積極的に情報などの記事（原稿）を提供（投稿）していただきたいと思ひます。

私のささやかな経験では、短い埋草の記事で気のきいたものがあると、大変助かりますし、読者に喜ばれます。またかつて山本義一先生が、“天気”にもうすこし人間に関係したものを載せるとよいと言われたことがあります。素顔'88、研究機関めぐり、などが好評だったのも、この線にそったものだからと思ひます。

天気の編集委員は、忙しい本務のかたわら貴重な時間をさいて編集にあたっているのです、わかっているても手がまわらないというところがあります。したがって企画がよくても長続きさせるのは容易ではないのですが、周囲の方々の御理解と御助力をいただき、ぜひ会誌の内容をますます充実させていただきようお願いします。

〈岸保勘三郎評議員〉

今期の評議員会にはいろいろな分野から評議員が選出され、大変喜ばしいことだと思ひます。私自身ひと昔前は理事会の運営に関与していましたので、本日は新しい評議員の方々からの貴重なご意見をきかせて貰うことにします。ただひとこと、二年後に予定されている国際学術連合会議（ICSU）の国際気象・大気物理学協会総会（IAMAP）についてコメントしてみたいと思ひます。

ご存知のようにこの IAMAP の総会は今までヨーロッパ、アメリカなどで二年に一度開催されてきましたが、私など現役の時にはこの総会を日本でも開催できないかと考えてきました。ある意味で、1980年代のわれわれの夢のひとつでした。しかし、最近の気象集誌の充実、日本の研究者の国際的貢献などに支えられて、二年後の1993年に上記総会が日本で開催されるような状況になってきました。事務的な面で理事会も大変なこととは思ひますが、この総会開催が成功するよう、頑張っけて頂きたいと思ひます。

〈倉嶋厚評議員〉

1991年7月

「気象ジャーナリズムの発展のために」

鹿児島気象台長を最後に気象庁を定年退職し、NHKで気象キャスターの仕事をして7年余りになります。この間に放送ジャーナリズムを内側から見ての所感を述べます。

ジャーナリズムは時間に追われながら事柄の事件性、新奇性を追及するあまりセンセーションナリズムに陥り、また分り易さを求めるあまり事柄を安易に割り切るなど、一種の「いいかげんさ」というか、アバウトな性格があります。しかし、一方では、複雑な事柄や隠された事実の本質に迫る鬼気迫るような努力と執念に満ちた仕事や激論の現場に遭遇し、目を見張り息を飲んだことが、何度もあります。

気象関係の方々がジャーナリズムに接する場合、前の方のアバウトな性格を初めに経験して、それを嫌悪または軽視したり、逆にそれに乗って無節操に踊ってしまい、そのことから、学会はジャーナリズムを必要以上に避ける傾向が生れたのではないかと思ひます。しかし、ジャーナリズムの持っている本来の真剣さは、科学者が真理に迫る真面目さとまったく同じです。

私が学会誌「天気」にお願いしたいのは、いい意味での「気象ジャーナリズム」の面を推進してほしいということです。具体的にいうと、多くの人が「本当のところを知りたい」と思っていることとか、いまは誰も関心を持っていないが将来大きな問題になりそうな事柄について、しかるべき会員が個人の意見として「巻頭言」または「論壇」に書くなどしてオピニオン・リーダー的役割を果たしたり、テレビや新聞の気象解説に対する批判・助言をしたり、気象現象の写真入りの解説などをもっととりあげて博物誌的な楽しい側面を出すことなどです。もちろん、これは、学会誌の本来の目的である研究成果の発表がきちんと行われた上での話です。

〈立平良三評議員〉

気象庁の業務の発展には気象学会の支援が不可欠であり、学会員の半数近くが気象庁職員でもある。各気象官署では、それぞれ業務の改善を目指して努力が続けられているが、気象学の現状に照して、必ずしも適切な方向付けがなされていないように思ふ。「天気」などの誌上に、技術開発のための手引きや実例、あるいは必要な基礎知識などが掲載されることを希望する。気象業務に関連した技術などは学会誌に馴染まないと思ひますが、積極的に掘り起こす努力をお願いしたい。

学会のレーダー月例会は気象庁のレーダー業務の改善

に寄与したと評価しているが、例えば「予報技術月例会」といったものも開催してみてもどうだろう。アメリカ気象学会では Broadcast Meteorology のシンポジウムが定期的に開かれているが、この種の問題も「予報技術月例会」でまず議論してみるのが適切かも知れない。

〈沼口 敦評議員〉

若手研究者の立場から、二点ばかり意見を述べたい。一つめは、積極的に学問間・機関間の研究協力の促進の努力をお願いをするということである。現在、地球環境の総合的な研究の必要性が叫ばれているが、それには細分化された学会間や観測研究機関間の協力が必要となる。その中で気象学会は比較的よくまとまっている学会であると思われ、学際協力において中心的な役割を担うことが期待される。「天気」などで周辺学問分野・学会や各研究機関での話題の紹介に努めていただくとともに、関連学会との共催行事などの開催にもより多くの努力をお願いしたい。また、各機関間のデータなどの自由な流通について便宜を仲介する機関として、気象学会に活躍していただきたいと思う。

学際協力を実質的に進めて行くためには、特に若手の研究者レベルでの研究交流の活発化が重要であろう。そ

こで二つめに述べたいことは、近年活発化してきている若手研究者の自主的活動に対する理解と支援をお願いしたいということである。昨年には、第一回「夏の学校」の開催、名簿の発行、品切本の復刊運動などが行われた。また、各地で若手を中心とした研究会が定例的に開催され、異なる大学・分野の研究者の交流の場として成果を挙げている。しかし、現状では、情報の不足、財政的困難などの問題があり、さらなる活発化の障害となっている。そこで、このような活動に対して学会にご理解いただき、さまざまな形で支援をお願いすることにより、より実のある研究交流活動が促進されることを望みたい。

最後に私のような若輩が意見を述べる機会を与えてくださった理事の方々に感謝するとともに、今後もより広く若手の意見を汲み入れる窓口をひらいていただくことをお願いしたい。

## 5. おわりに

以上のご意見・ご提言を踏まえて、学会活動を発展させるよう理事会として努力していきます。

## スーパーコンピュータCPU提供のお知らせ

(財)科学教育研究会の「スーパーコンピュータと社会」研究委員会から気象学会へ、本年も CPU 提供の申し出がありました。環境問題の研究を発展させるため、特に、スーパーコンピュータを大量に必要とする分野の一つとして気象学が選ばれました。以下の案内をご覧のうえ、希望者は応募要領に従って、1991年9月10日までに学会事務局宛て申し込んで下さい。

提供内容：使用計算機 NEC/SX-2A

CPU 200時間

使用期間 1991年10月—1992年9月

条件：

- (1) 応募者(代表者)は日本気象学会員であること。
- (2) スーパーコンピュータで初めて実現する研究テーマであること。効率的に計算時間を活用するため、

採用は原則として2件以下とし、選考は気象学会理事長が任命する選考委員会が行なう。

- (3) 東京都中央区勝どきにあるスーパーコンピュータ研究所(ISR)に設置の端末から使用する。
- (4) 研究成果は研究者本人に帰属する。ただし、研究終了後、上記研究委員会主催のセミナーで報告を行うと共に、ISRのニューズレターにレポートを提出する。

応募要領：

A4版用紙にワープロで、①研究者氏名・所属(複数の時は代表者を筆頭に連記)、②連絡先(住所、電話、FAX等)、③研究テーマの概要、④計算内容の説明(スーパーコンピュータ利用の理由等)、を明記すること。